

理法身・智法身と五法

足 立 俊 弘

一 はじめに

奈良時代末期の法相宗の行信と平備の著作には、平安初期の空海などに先行して理法身・智法身の用例が確認できる。用例自体は奈良時代の三論の智光や、中国では華嚴の澄観などにも見られることが既に報告されている。⁽¹⁾

理法身・智法身の思想全体の形成過程については未だ不明な点が多いが、行信と平備に関する限り、基と慧沼によって示された、『成唯識論』説にもとづく『金光明經』所説の法身に対する解釈の流れを汲んだ思想であると評価できる。⁽²⁾

平備についてはすでにある程度検討がなされている。そこで本稿では、これまで学界に未報告の行信の理法身・智法身を取り上げて、その思想的意義について若干の私見を述べてみたい。

二 玄奘訳『成唯識論』

『成唯識論』では、法身の語は大略二つの意味において用いられている。⁽³⁾ 本稿では便宜上これらを広義の法身、狭義の法身と呼ぶことにする。広義の法身とは、

此法身五法爲性。非淨法界獨名法身。二轉依果皆此攝故。如是法身有三相別。(T31.57c)

と説かれる法身である。つまり二転依果(大涅槃と大菩提)であり、五法を性とし、三身の相をもつとされる法身であり、法身としてはより古い伝統的な概念であると言えよう。

狭義の法身とは、「五法撰三身門」第二師説に示されるところの自性身(清淨法界)の異名として説かれる(T31.57c)唯識説独特のものである。狭義の法身は『仏地經論』にも説かれており、智と切り離されている点に玄奘の特色が見出される。

「五法撰三身門」には五法と三身の関係について二つの説が示されているが、そのうち第二師説が正義とされている。ここでは、自性身と清淨法界、自受用身と四智との対応関係が

説かれている。つまり五法と直接結びついているのはこの二身であり、他受用身と變化身は智から示現する仏身とされる (T31.57c-58a)。

三 漢訳『金光明經』「分別三身品」

「分別三身品」は、漢訳では真諦訳と義浄訳のみにあつて現存梵本には欠けている。本品では化身・応身・法身の三身が説かれる。法身については以下のように説かれる。

云何菩薩摩訶薩。了知法身。為除諸煩惱等障。為具諸善法故。

唯有如如如智。是名法身。前二種身。是假名有。此第三身。

是真実有。為前二身而作根本。(T16.408b)

法身は「如如と如如智」であると規定される。また法身のみが「真実有」であり、心・化の二身は法身を根本として顯現する「假名有」であるという二重構造的な三身説となっている。

四 基『大乘法苑義林章』

『金光明經』の三身に対する解釈は「三身義林」にまとめられて説かれている。基は『金光明經』の法身を『成唯識論』第二師説にもとづいて、「清淨法界」と「四智品常遍色身真実有為無為功德」を合わせたもの、つまり五法あるいは自性身と自受用身を合わせた仏身であると解釈し、このような法身

を「理智冥合」(T5.361c)と述べて「理と智」の語によって表している。

ところが基は、『成唯識論』第二師説だけに基づいて法身を考えるため、法身とは清淨法界そのものである自性身の異名、つまり狹義の法身でなければならず、「無為の功德の本」(T45.306b)でなければならぬと述べている。最終的に基は「經文義理無爽」(T45.306c)と述べて、經文である以上『金光明經』説を認めざるを得ないという中途半端な結論に至つて

五 慧沼『金光明最勝王經疏』

慧沼は「智理二合名法身」(T39.214b)と述べて、『金光明經』の法身を「理と智」によつて表し、また自性身と自受用身を合わせた仏身である (T39.221a)とも述べている。このような解釈は基とほぼ同じであるが、以下の記述に基と異なる点が見られる。

此法身有二。一自性法身。二功德法身。今包含二。為除煩惱等障明為得自性法身。為具善法故明為得功德法身。即淨法界四智心品總名法身。能證所證合名法身。仮佛実佛二類有異分出応化。不爾就總應化亦名法身。故成唯識云。如是法身有三相別。

(T39.214a)

慧沼は、法身には「自性法身」と「功德法身」の二種があ

るとし、さらにその二種の法身が五法の総てを含むとしている。また慧沼は、「実仏」である法身が「仮仏」である応身・化身を分出するという『金光明経』の三身のあり方と同じことが説かれているとして、『成唯識論』の「法身有三相別」の文を引いている。先に確認したように、この文は広義の法身を規定したものである。つまり慧沼は『金光明経』の法身と『成唯識論』広義の法身を等値した上で、『金光明経』の三身のあり方と『成唯識論』広義の法身が三身の相を有するというあり方をもまた等値しているのである。これはどういうことか。

『成唯識論』において「三相別」、つまり三身の相のあり方が五法との関係を中心に具体的に叙述されているのが「五法撰三身門」第二師説である。三身といっても受用身は自受用と他受用に分かれるので実際は四身となる。すでに確認したように第二師説では、五法と直接結びついているのは自性身と自受用身であり、他受用身と変化身は智から示現する仏身であるとされていた。恐らく慧沼は、この五法を中心とした四身の二重構造を、『金光明経』の三身の二重構造と同じであるともみなしていたのである。

『金光明経』の法身とは五法を性とする『成唯識論』広義の法身と等しく、さらに四身に約せば第二師説における自性身と自受用身を合わせたものであるというのが慧沼の理解の

根幹をなしている。

六 行信『仏説仁王護国般若波羅蜜經疏』

行信は法相宗の学者であり、智鳳（生没年不詳）に師事して法相教学を学んだとされる⁽⁴⁾。智鳳は入唐して慧沼の門人である智周に学んでいる。

『仏説仁王護国般若波羅蜜經疏』（以下「行信疏」⁽⁵⁾）は行信の現存する唯一の著作である。円測撰『仁王經疏』の抄出という構造を持ちながら、そこに真諦、吉蔵、玄範など他師の疏の引用や自釈と思われる文章を以て補った内容となっている。『正倉院文書』への初出が天平勝宝五年（七五三）であり、推定成立年はこれを最下限とする。

法身に対する言及は、『仁王經』で仏の徳の一つとして説かれる「法身」に対する注釈として現れる。円測は通名法身、五分法身、真如法身の三種を説いている（133, 378b）。『行信疏』は基本的に円測の『仁王經疏』に依拠しているが、法身については円測の解釈そのまま用いず次のように述べる。

言法身者。小乗云五分法身。大乘云。若智法身者四智為體。若理法身者真如為體。（『日本大藏經』10, 185a。『大日本仏教全書』1, 10b）

円測は『仁王經疏』において教理的問題を論ずる際に大乘説と小乗説を対比させるといふ論法を多用しているが、行信

はこれを依用してまず円測も挙げていた五分法身を小乗の法身とし、大乘の法身として理法身と智法身を挙げている。五法という語は用いていないものの、真如（清浄法界）と四智を合わせて五法を総称することを意図していたと思われる。

自性身、自受用身という四身説の用語は使われておらず、『成唯識論』説との整合性はもはや問題とされていらない。法身を五法との関係からのみ捉えて理法身と智法身の二種の法身であるとしている。

七 まとめ

基は『金光明経』の法身を「理と智」によって表すとともに、『成唯識論』「五法撰三身門」第二師説における自性身と自受用身を合わせた仏身であると解釈している。ところが基は、智から切り離された『成唯識論』狭義の法身を本義とするため、『金光明経』の法身を認めることには難を示している。

慧沼は基を継承しつつ、そこに『成唯識論』広義の法身に對する新たな解釈を加える。慧沼は『成唯識論』第二師説における五法を中心とした四身の二重構造が、『金光明経』の三身の二重構造と等しいものであると認識しており、実質的に『金光明経』の法身と、『成唯識論』広義の法身と、第二師説における自性身と自受用身を等値している。

理法身・智法身と五法（足立）

行信は五法によって理法身・智法身を定義している。これは直接的には『金光明経』の法身と『成唯識論』広義の法身と等値した慧沼の考え方の流れを汲むものであり、「理と智」の概念を通じて両要素の分離という事態を内に抱えたまま、一旦は切り離された智を再び法身に引き戻したものと評価できらる。行信などに見られるような理法身・智法身の思想は、奈良時代末期以降宗派内外との論争を通じて法相宗の教理の固定化が進むにつれて、次第に異説として排除されていったのではないかと思われる。

- 1 藤井淳「理法身と智法身」『印度学仏教学研究』五二—一
- 2 藤井前掲論文、拙稿「奈良仏教における理智法身——『最勝王経』の注釈書類を中心に」『密教学研究』三七（掲載予定）
- 3 広狭二義の法身については以下を参照。長尾雅人「仏身論をめぐりて」『哲学研究』五九一（四五—三）、一九七一。ルーベン・アビト「法身」の二種について」『印度学仏教学研究』二五一—、一九七六。
- 4 『本朝高僧伝』『大日本仏教全書』六三、四一上
- 5 主要先行研究は以下を参照。末木美文士「日本法相宗の形成」『仏教学』三二、一九九二。拙稿「行信の『仁王経疏』における他疏の引用」『大正大学大学院研究論集』二八、二〇〇四
- 6 『東大寺僧教輪経疏奉請啓』『大日本古文书』一二、四二〇

〈キーワード〉 理法身、智法身、五法、行信

（大正大学総合佛教研究所研究生）

the *Taikyōhyakuren-shō*

Keijun KANEKO

The paper is mainly intended to make clear the faith of Jōkei, a Buddhist priest of the Japanese Hossō sect, in Prince Shōtoku. It is necessary at first to decide the authorship of the three works preserved in the *Taikyōhyakuren-shō*. If these works were really written by Jōkei, following his view of the prince as the incarnated goddess of mercy, we could verify his strong faith that the life of the prince is likened to Buddha. Jōkei again accepts the prince as being one who contributed to the prosperity of the Hossō sect.

54. The *Pañca-dharma* and the *Dharma-kāya* associated with *Ri* (理) and *Chi* (智)

Toshihiro ADACHI

Gyōshin, who belonged to the Hossō-shū in the Nara era, had a peculiar view of *hosshin* (法身, *dharma-kāya*) that was associated with *ri* (理) and *chi* (智). In the *Ninnōkyōsho*, he postulated that *ri-hosshin* (理法身) had the nature of *shinnyo* (真如, *tathatā*) and *chi-hosshin* (智法身) had the nature of *shi-chi* (四智, *catvārijñānāni*). However, it has never been reported that Gyōshin possesses a view such as the one indicated above. A background of his thinking can be found in Huizhao's *Jinguangming zuishengwang jingshu*. Huizhao described the Dharmakāya of the *Jinguangming zuishengwang jing* through the words *ri* and *chi*, and equated it with the Dharmakāya in the broader perspective of *Chengweishi lun* whose nature was explained to be like that of the five elements (五法, *pañca-dharma*).

55. Observations on the Texts Quoted in Myōe's *Zaijarin* and *Shōgonki*

Mieko YONEZAWA

Zaijarin (1212) and *Shōgonki* (1213) were written by Myōe (1173-1232) as a series of critiques of Hōnen's (1133-1212) *Senchakushū* (1198). At the begin-